フエ阮朝木造建築におけるドゥイ・ケオ絵様について

A STUDY ON THE DUOI KEO DESIGN OF WOODEN ARCHITECTURES
IN THE NGUEN DYNASTY AT HUE

白井 裕 泰*, 六反田 千恵**, 中川 武***

Hiroyasu SHIRAI, Chie ROKUTANNA and Takeshi NAKAGAWA

In order to clear the transition of design style, we have studied on the Duoi Keo design of wooden architectures in The Nguen Dynasty at Hue. The conclusion of this paper is as follows. : 1. To clarify the production age of the Duoi Keo design of wooden architectures, we have cleared the creation age and detailed repair of 34 wooden architectures in existence by the document and hearing. 2. We have classified the Duoi Keo design of wooden architectures to four types, A type is “両渦文型”, B type is “龍頭吐水唐草文型”, C type is “小龍頭渦唐草文型”, D type is “渦唐草文型”. 3. The transition of the Duoi Keo design is as follows. A-type → B-type → C-type and D-type. 4. We have presumed the new construction age of the wooden architectures in existence, that is that Dien Tho Ninh was built in 1820, the upstairs of Ngo Mon was built in 1921-23, and Hung Mieu was built in the middle of 19 century.

Keywords : The Duoi Keo design, wooden architectures, The Nguyen Dynasty, Hue, Vietnam

ドゥイ・ケオ絵様, 木造建築, 阮朝, フエ, ヴィエトナム

1. はじめに

ヴィエトナム・フエにおける阮朝木造建築は、1993年ユネスコ世界遺産に登録された「フエの建造物群」の主要な構成要素である。これまで早稲田大学中川武研究室は、1996年以来、京城、帝陵に現存する木造建築遺構群に関する調査を実施し、配置計画研究、寸法計画研究、細部意匠研究、文献研究など様々な視点から遺構群の分析を通して研究成果を発表してきた。

本論文では、細部意匠研究の1つとして登梁木鼻（ドゥイ・ケオ）絵様について考察を行う。フエにおける阮朝木造建築の遺構群は、創建以来、幾度も修理が行われ、また再建されたものもある。その経緯に関して、文献研究だけでは明らかにすることができず、建築史的見地から、遺構の建立年代を確定する必要がある。本論文では、細部意匠の様式変遷を考察することによって、建立年代を確定するという方法論を前提に、ドゥイ・ケオ絵様の変遷について考察を試みるものである。

現存する遺構群に関するこれまでの調査によって、各遺構にはその時々の破損状況に応じて、解体修理、半解体修理、屋根替修理、部分修理（塗装修理を含む）などの修理が繰り返し行われてきたことがわかっている。したがって現存遺構と創建建物の状況が異なっている可能性が極めて高く、同一遺構内に当初材と後補材が混在していると考えられる^{注1)}。

しかしながら、阮朝木造建築群の主体となる遺構の基本的な架構形式は、一部の例外はある^{注2)}が、基本的には創建当初の形式を踏

襲していると考えられる。

現存遺構の創建年代および修理については、『欽定大南会典事例』（1851）、『大南実録』（1844-1910）、『大南一統志』（1909）などの文献史料から、建立年代および修理経緯はある程度把握することができるが、完全なる把握は困難であるといえよう。

2. 研究方法

本研究では、阮朝木造建築遺構を対象として取り上げ、その細部意匠の様式的変遷を明らかにする。細部意匠の中で、ドゥイ・ケオに注目し、その拓本資料を作成し、現存する遺構におけるドゥイ・ケオの絵様情報を整理し、絵様の分類を行う^{注3)}。次に、阮朝木造建築の創建年代および修理に関する情報を、前記三文献から抽出し、整理する^{注4)}。さらに現存遺構におけるドゥイ・ケオ絵様が、創建当時の様式をもっていると仮定し、分類された絵様の変遷を明らかにする。ここで現存遺構におけるドゥイ・ケオ絵様が創建当時の様式をもっているという仮定が成立するかどうかを明らかにする必要があるが、知見できる範囲内であるが、これまでの修理を見ると、ケオを取り替えるとき、旧ケオ両面のドゥイ・ケオ絵様を剥ぎ取って新材に張り付けたり、旧ドゥイ・ケオ絵様に倣って新ドゥイ・ケオ絵様を彫刻していることから、この方法が従来の修理においても踏襲されてきた可能性が高く、この仮定が成立すると考えることができる。

* ものつくり大学技能工芸学部建設学科 教授・工博

Prof., Dept. of Building Technologists, Faculty of Technologists, Institute of Technologists, Dr.Eng.

** 長谷川逸子・建築計画工房 所員・博士(建築学)

Staff, Itsuko HASEGAWA Atelier, Dr.Arch.

*** 博物館明治村 館長, 早稲田大学 名誉教授・博士(工学)

Prof. emeritus, Waseda University, Director, Open Air Museum Meiji-Mura, Dr.Eng.

3. 先行研究

ヴィエトナム・フエにおける阮朝木造建築の細部意匠については、先行研究として、一之瀬裕行（2000,2001,2002）、川嶋彩（2000）、六反田千恵（2000-02,2006-10,2012・13）などの論文があり^{注5)}、これらの先行研究を踏まえて、六反田は早稲田大学博士論文『フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究』（2014年2月）をまとめた。

3-1 前期(2000-2002)の細部意匠研究

一之瀬（2000）は「フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究1」で研究方法と問題を整理し、川嶋（2000）は「フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究2」で現存木造遺構のドゥイ・ケオ彫刻絵様の分類を行った。これらの研究が本論文のベースになっている。

川嶋（2000）は、対象としたドゥイ・ケオ絵様を次の5種（ただしここでは絵様のない無地型を除いている）に分類した。

①渦紋型：立体的な元渦、中央に両渦紋を配するもの。また柱元下方に渦紋を設け、外形をこれに合わせた繰型とする。先端にも渦紋を施す。その他に渦紋を基調として若葉を付加する意匠を施すが、その形状は一定しない。

遺構例：左廡、右廡、太和殿、隆徳殿、肇祖廟、世祖廟、土公祀、頭臨閣、興祖廟（左右裳階）、寿寧殿、北闕台（方屋）、明成殿

②渦龍型：立体的な元渦、中央に先端を向く龍頭を配するもの。龍頭は頭髮、鼻、瞳など具体的な形状を持つ。その他は①と共通する。

遺構例：興祖廟（前裳階）、五鳳楼（下層）、明命帝陵崇恩殿・頭徳門（初層）・碑亭・明楼（初層）、紹治帝陵表徳殿・鴻澤門・碑亭^{注6)}

③唐草型：元渦を用いず、唐草紋を主体とするもの。柱元下方の繰型、先端渦紋は①と類似する。

遺構例：長愉樹、隆安殿、明徽閣（国子監）、明命帝陵明楼（上層）・頭徳門（上層）、太平御覧書楼（上層）、同慶帝陵凝禧殿後殿・宮門

④龍唐草型：③と類似するが、中央に柱元を向く小龍頭を配するもの。瞳、鼻など具象的な形状を持つが、②の龍頭とは形状が異なる。

遺構例：太平御覧書楼（初層）、延寿宮正殿、嗣徳帝陵和謙殿・良謙殿・謙宮門・鳴謙堂・愈謙樹・冲謙樹、建福帝陵執謙堂、育徳帝陵隆恩殿、同慶帝陵凝禧殿前殿

⑤龍雷型：柱元方を向く小龍頭を直線的な雷紋、唐草紋を組み合わせるもの。小龍頭は④と類似する。

遺構例：五鳳楼（上層）

また川嶋は文献史料による遺構の創建年代を根拠として、5分類の成立時期を以下のように整理した。

①渦紋型：嘉隆元（1842）から明命年間（1820-40）初頭、すなわち19世紀初頭の創建遺構のほとんどがこの型に属する。ただし王宮内の延寿宮寿寧殿のみが嗣徳（1847-83）初年創建と遅れる。

②渦龍型：この型に属するものは、総て明命年間初頭から紹治年間（1841-47）を経て、嗣徳年間初頭の19世紀中期の創建遺構である。

③唐草型：早いもので明命年間、遅いもので成泰年間（1889-1907）初頭の比較的長い期間（19世紀前半～末期）に分散する。

④龍唐草型：嗣徳年間初頭から成泰年間初頭の19世紀後半の創建遺構に限られる。

⑤龍雷型：明命14（1833）創建の五鳳楼上層のみに見られる。

このように19世紀初頭に①渦紋型、19世紀中期に②渦龍型、19世紀中期～末期に③唐草型および④龍唐草型が用いられたと考えられる。⑤龍雷型は明命期のものであるが、啓定帝陵遺構や紫禁城の仁聲八表殿など啓定年間（1916-25）の創建になる遺構に類似した意匠が見られることから、王朝末期（20世紀前半）の意匠である可能性が高いと指摘している^{注7)}。

また六反田（2000）は「フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究3」で五鳳楼初層のドゥイ・ケオ彫刻絵様の分類を行い、ドゥイ・ケオに施された彫刻意匠が多様性を持っていることを指摘した。他の遺構におけるドゥイ・ケオ絵様が遺構内において同一性を持っていることから、五鳳楼のドゥイ・ケオ絵様の特異性を明らかにした^{注8)}。

さらに一之瀬（2001）は「フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究5」で肇祖廟における木部彫刻部位の特徴を明らかにし、六反田（2001）は「フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究6」でドゥイ・ケオ絵様の部分である元渦紋（頭部渦文）形状を分類した。また一之瀬（2002）は「フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究7」でケオの形状と彫刻について分析し、5つのタイプに分類し、ケオ彫刻がより多くの人が通り、より人の目に触れる部位に多くの彫刻を施すという傾向を指摘し、架構部位によってその彫刻形式が使い分けられ、彫刻によって遺構の格式を表現していることを明らかにした。六反田（2002）は「フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究8」で大梁木鼻（ダウ・チェン）の意匠形態による分析を行い、タイプ1（線刻／浮彫）、タイプ2、タイプ3（線刻／浮彫）、タイプ4の計6種に分類した。

タイプ1：後方(柱元)上部から下向きの曲線の先端に上向きの渦紋が取り付け、上向き渦紋の後方若葉を持つもの。

タイプ2：後方上部からの下向きの渦紋と前方上部からの下向きの渦紋が交差するもの。

タイプ3：前方上部からの下向き渦紋とこれに付随する若葉や小渦、葉紋などで構成される。

タイプ4：後方上部から渦紋と前方上部からの渦紋が接し、これに付随する若葉、小渦、葉紋などがみられる。

3-2 後期(2006-2014)の細部意匠研究

前期の細部意匠研究以後、六反田は2006-12にかけて継続的に細部意匠研究を行い、それまでの研究成果を踏まえて、早稲田大学博士論文『フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠に関する研究』（2014年2月）をまとめた。この論文において特に注目される点は、第1に阮朝建築遺構群の造営過程を文献史料およびフエ遺跡保存センター（以下 HMCC と略す）からのヒアリングによって明らかにしたこと、第2に重梁の彫刻絵様構成を分類し、その変遷を明らかにしたことである。

以上の先行研究を踏まえて、本論文ではドゥイ・ケオ絵様の変遷過程を再考し、様式編年を明らかにする。

4. 現存遺構の創建年代と修理経緯

阮朝木造建築遺構におけるドゥイ・ケオ絵様の制作年代を明らかにするため、現存遺構の創建年代と修理経緯を漢喃史料である『大南寔録』『欽定大南會典事例』『大南一統志』の三文献史料により明

表 1 フエ阮朝木造建築遺構の創建年代と修理経緯

場所	区域	No.	遺構	創建年代	修理1	修理2	修理3	修理4	戦後修理1	戦後修理2	備考
皇城	外朝	1	五鳳楼	嘉隆5・1806【事】(乾元殿)	明命12・1831【事】(乾元殿)	改建: 明命14・1833【事・堂・統】	成泰年間・1889-1907	1921-23	1990-92	1999【屋根】	2013から解体修理
		2	太和殿	嘉隆4・1805【堂】	嘉隆18・1819【堂】	移築: 明命13-14・1832-33【事・堂・統】	成泰3・1901【統】	啓定8・1923【篇】	1958【屋根】	1976-93	1960-1992に小規模修理
		3	隆徳殿	嘉隆3・1804【統】	明命13・1832【屋根】【事・統】	成泰12・1900【統】			2005-2010【ものづくり大解体】		
	太廟	4	肇祖廟	嘉隆3・1804【堂・統】	嘉隆13・1814【堂】	明命3・1822【堂】	明命10・1829【屋根】【堂】	明命11・1830【屋根】【事】	明命18・1837【正殿】【事】	紹治2-3・1842-43【屋根】【事】	2013から解体修理
									1982-83		
									1990		
	世廟	5	顯臨閣	明命2-3・1821-22【堂】	明命18・1837【事】				1983-84・1986	1996-98【解体】	
		6	世祖廟	明命2-3・1821-22【堂】	明命4-5・1823-24【堂】	明命10・1829【屋根】【堂・事】	明命18・1837【事】	明命20・1839【屋根・塗装】【事】	1985・1989・1990	1996-98【解体】	
		7	土公祀	明命2・1821【統】	紹治2・1842【屋根】【事】				2002【解体】		
	紫禁城	8	興祖廟	嘉隆3・1804【堂】(皇考廟)	嘉隆11・1812【堂】(皇考廟)	移建: 明命2・1821【堂・統】	明命10・1829【屋根】【堂】	紹治2・1842【屋根】【事】	嗣徳31・1877【堂】	移建: 1951【現遺構】	1947焼失
								嗣徳9・1855【堂】		1995-97【解体】	現遺構の建築年代は不明
		9	右廡	嘉隆18・1819【事】	明命12・1831【堂】	明命11-12・1830-31【事】			1981		
	延寿宮	10	左廡	嘉隆18・1819【事】	明命12・1831【堂】	明命11-12・1830-31【事】			1986		
		11	太平御覽書楼	同慶2-3・1886-87【堂】	同慶初に改構【統】				1987・1989-91	2011-13【半解体】	
		12	延寿宮正殿	嘉隆3・1804【堂】(長寿宮)	嘉隆6・1807【堂】(長寿宮)	嘉隆9・1810【堂】(長寿宮)	嘉隆13・1811【統】(寧寿宮)	嗣徳1・1847【堂】(慈寿宮)	1967・1972・1983	1997-99【半解体】	啓定1・1916延寿宮に改名
京城	皇城外	13	長愉榭	明命1・1820【堂】(慈寿宮)	紹治1・1841【堂】(慈寿宮)	紹治3・1843【堂】(慈寿宮)	嗣徳1・1847【堂】(慈寿宮)	啓定2・1917【篇】(延寿宮)	1967・1972・1983	1997-99【半解体】	啓定1・1916延寿宮に改名
		14	寿寧殿	嗣徳2・1848【堂】(喜寿宮)	嗣徳12・1858【堂】(喜寿宮屋根)	成泰13・1911【統】(寧寿宮)			1999-2000【解体】		1927涼風亭を増築
		15	隆安殿	紹治5・1845【堂・統】(保定宮)	嗣徳3・1849【事】	嗣徳3・1849【事】(建具)	移築: 維新2・1908【新書館】	啓定8・1923啓定美術館に改名	1972・1984	2008-11【解体】	1947蔵古院に改名
		16	明徴閣	明命1・1820【事】	明命10・1829【篇】				1994-95		1958フエ博物館に改名
皇帝陵	嘉隆帝陵	17	明成殿	嘉隆13・1814【堂・事】	明命8・1827【堂】	明命12・1831【堂】	明命20・1839【堂】	啓定7・1922【篇】	2000		維新2・1908【篇】改製
				嘉隆14・1815【統】	明命12・1831【堂】	明命20・1839【堂】			1992-95正殿新築	2001【塗装】	
		18	碑亭	紹治1・1841【堂・事】	紹治6・1846【統】				2003-04【屋根・塗装】		
	明命帝陵	19	顯徳門	紹治1・1841【堂・篇】	紹治6・1846【統】				2010		
		20	崇恩殿	明命21・1840【事・統】	紹治6・1846【事】	嗣徳12・1859【堂】	同慶2・1886【堂】		1999-2000【解体】		
		21	明様	紹治1・1841【堂・事】					1997-2000		
	紹治帝陵	22	碑亭	嗣徳1・1847【堂】							
		23	鴻澤門	嗣徳1・1847【堂】							
		24	表徳殿	嗣徳1・1847【堂・事・統】	嗣徳9・1855【堂】(屋根)	嗣徳12・1859【堂】			2006-10【解体】		
	嗣徳帝陵	25	愈謙榭	嗣徳20・1866【堂】					1985・1988		
		26	冲謙榭	嗣徳17・1863【篇】					1985		
		27	謙宮門	嗣徳20・1866【堂】							
	建福帝陵	28	和謙殿	嗣徳17・1863【篇】	嗣徳19・1865【堂】(屋根)				1990年代		嗣徳30・1876【堂】謙宮成
		29	鳴謙殿	嗣徳17・1863【篇】							左從院
		30	良謙殿	嗣徳17・1863【篇】							
	育徳帝陵	31	執謙殿	嗣徳20・1866【堂】	建福1・1883【續・篇】				1997-98		
		32	隆恩殿	成泰2・1900【統】	成泰11・1909【篇】				1956	1998	
		33	宮門	成泰1・1899【續】(恩陵)					2011-2013		
	同慶帝陵	34	凝禧殿	同慶3・1887【篇】	成泰1・1899【堂】	啓定6・1913	啓定8・1923【篇】		1959・1986・1990・1993		

表注: 【堂】=大南憲録、【事】=欽定大南會典事例、【續】=欽定大南會典事例續編、【統】=大南一統志、【篇】=篇廟、戦後修理はHMCCによる

らかにする。これをまとめたものが表 1 である^{注 9)}。

ただし現状太祖廟は、1947 年に焼失し、それ以後に再建されたものであることから、現存遺構群から除外する。同様に清明楼は 1998-2000 年に再建されたことが判明しているので除外する。さらにドゥイ・ケオ絵様のない遺構も除外する。したがってここで対象とする遺構は、京城・皇城内の五鳳楼、太和殿、隆徳殿、肇祖廟、顯臨閣、世祖廟、土公祀、興祖廟、右廡、左廡、太平御覽書楼、延寿宮正殿、長愉榭、寿寧殿、京城・皇城外の隆安殿、明徴閣、皇帝陵の嘉隆帝陵明成殿、明命帝陵碑亭・顯徳門・崇恩殿・明楼、紹治帝陵碑亭・鴻澤門・表徳殿、嗣徳帝陵愈謙榭・冲謙榭・謙宮門・和謙殿・鳴謙堂・良謙殿、建福帝陵執謙殿、育徳帝陵隆恩殿、同慶帝陵宮門・凝禧殿であり、現存する阮朝木造建築遺構 63 棟のうち、京城・皇城内 14 棟、京城・皇城外 2 棟、皇帝陵 18 棟の合計 34 棟である。

現存遺構の建立年代を、文献史料および HMCC からのヒアリングをもとに推定すると、表 1 において着色した欄の年代になる。

5. ドゥイ・ケオ絵様の分類

5-1 ケオ木鼻の部位名称

川嶋 (2000) は、ケオ木鼻の部位名称として「先端、中央、柱元、柱元下」を用いているが、ここでは「鼻先、顔、頭、顎」という名称を用いる^{注 10)}。また顔下の線形を「口」と呼ぶことにする (図 2 参照)。

5-2 絵様の種類

川嶋(2000)は、ドゥイ・ケオ絵様を「①渦紋型、②渦龍型、③唐草型、④龍唐草型、⑤龍雷型」と分類しているが、ここでは「A 両

渦文型、B 龍頭吐水唐草文型、C 小龍頭渦唐草文型、D 渦唐草文型」

の 4 つに分類した (図 4 参照)。この分類の名称は、主にケオ木鼻の顔部の様式から名付けたものである。ドゥイ・ケオ絵様の分類を 5 つから 4 つにしたのは、龍雷型を「C’ 小龍頭渦唐草雷文型」と呼ぶことができ、遺構例としては五鳳楼上層のドゥイ・ケオ絵様に限定され、「C 小龍頭渦唐草文型」の変形と考えることができるので、C タイプに含めたからである (図 6 参照)。「両渦文型」は、すでに六反田 (2006) が「両渦紋型」と呼称している^{注 11)}。また五鳳楼初層の「両渦文型」は、両渦文の一部が若葉化していることから「A’ 変形両渦文型」とした。ところで A タイプの絵様を用いる遺構のうち、嘉隆帝陵明成殿のみが帝陵内の建物であり、それ以外はすべて皇城内の建物であるが、これは A タイプの絵様が嘉隆期初頭から明命期初頭に限定されて制作されたこと、明命帝陵以降の皇城外および帝陵内の建物が B・C・D タイプの絵様を用いて紹治期以降に建立されたことなどによるものと考えられる。

6. ドゥイ・ケオ絵様の変遷

表 1 のフエ阮朝木造建築遺構の建立年代を参考にして、ドゥイ・ケオ絵様の変遷をまとめたものが図 1-1・2 である。

A タイプ: 両渦文型のドゥイ・ケオ絵様は、嘉隆帝期初頭から明命帝期 (1804-1821) 初頭に属し、唯一延寿宮寿寧殿のドゥイ・ケオ絵様だけが嗣徳 2 年 (1848) である。寿寧殿が延寿宮の前身である長寿宮が建立された時期と同じであるとすれば、嘉隆 3 年 (1804) に建立された可能性がある^{注 12)}。ところで明成殿重梁の彫刻絵様は、座龍 (龍が正面を向き、両足を踏ん張って座っている姿) が龍頭から水を吐き (龍頭吐水)、龍頭下の両側に小龍頭が配置されている構図

時期	Aタイプ: 両渦文型	Bタイプ: 龍頭吐水唐草文型	Cタイプ: 小龍頭渦唐草文型	Dタイプ: 渦唐草文		
嘉隆帝期 (1802-1820)	肇祖廟 1804	 図3 両渦文の額	 図2 木鼻の部位名称	 図4 絵様の種類		
	隆徳殿 1804					
	太和殿 1805					
	嘉隆帝陵 明成殿 1815	 図5 木鼻線形の変遷略図				
	左廡 1819					
	右廡 1819					
明命帝期 (1820-1841)	世祖廟 1821-22	明命帝陵 崇恩殿 1841	Cタイプ: 小龍頭渦雷文型 五鳳樓 上層 1833 ↓ 1900以降	隆安殿 1845		
	顯臨閣 1821-22	明命帝陵 碑亭 1841		明微閣 1845		
	土公祀 1821	明命帝陵 顯徳門 1841				
	五鳳樓 初層 1833					
紹治帝期 (1841-1847)	Aタイプ: 変形両渦文型	明命帝陵 明樓 1841				

図1-1 ドウイ・ケオ絵様変遷図(1802-1847)(図2・図3・図4・図5を含む)

となっていて、龍頭の額に両渦文がある。このことから推測すれば、
 両渦文は座龍(図7参照)を象徴していると考えられる^{注13)}。
 また両渦文の額(図3参照)をみると、嘉隆3年(1804)に建

立された肇祖廟・隆徳殿・寿寧殿には三葉の前髪がなく、嘉隆4年
 (1805)以降の太和殿をはじめとするすべての遺構に三葉の前髪が
 ついている。

寿宮正殿がCタイプ：小龍頭渦唐草文型のドゥイ・ケオ絵様、同時期に建立された長愉榭がDタイプ：渦唐草文型のドゥイ・ケオ絵様を用いている。同様に、嗣徳 17 年（1863）に建立された嗣徳帝陵和謙殿がCタイプ、同時期に建立された嗣徳帝陵鳴謙堂がDタイプを用いている。また同慶 3 年（1887）に建立された同慶帝陵凝禧殿前殿がCタイプ、同凝禧殿後殿^{注 15)}がDタイプを用いている。さらに成泰 11 年(1899)に建立された同慶帝陵宮門上層がCタイプ、宮門下層がDタイプを用いている。このことから、CタイプのほうがDタイプより格式が高い空間に用いられる傾向がみられる^{注 16)}。

図 7 明成殿重梁^{注 17)}（座龍を渦文で表現したもの）

以上の考察から、ドゥイ・ケオ絵様の変遷を概観すれば、Aタイプ：両渦文型→Bタイプ：龍頭吐水唐草文型→Cタイプ：小龍頭渦唐草文型およびDタイプ：渦唐草文型→C'タイプ：小龍頭渦唐草雷文型となる（図 6 参照）。

またドゥイ・ケオの線形をみると、獣形木鼻から線形木鼻へと変化した（図 5 参照）と考えられる^{注 18)}。線形木鼻の初出は、紹治 5 年（1845）に制作された隆安殿または明徽閣のドゥイ・ケオである^{注 19)}。

7. ドゥイ・ケオ絵様による建立年代の判定

本論文では、文献史料および HMCC からの聞き取りをもとに、現存する阮朝木造建築の建立年代を想定し、それに基づいてドゥイ・ケオ絵様の変遷を明らかにした。その結果、いくつかの遺構の建立年代に疑問が生じたので、ドゥイ・ケオ絵様の様式編年から判断して、新たに遺構の建立年代を推定した。

7-1 Aタイプに属する遺構の建立年代

寿寧殿：寿寧殿の建立年代は、文献史料から嗣徳 2 年（1848）と推定されたが、そのドゥイ・ケオ絵様の特徴は、嘉隆初頭を下らないことを示している。したがって寿寧殿は、延寿宮の初代目名称である長寿宮が建立された嘉隆 3 年（1804）と同時期に建立されたものと考えられる。

五鳳楼：五鳳楼の建立年代は、文献史料から明命 14 年（1833）と推定されたが、主楼閣上層のドゥイ・ケオ絵様の特徴は、成泰期以降の特徴を示している。五鳳楼は嘉隆 5 年（1806）に創建され、明命 14 年（1833）に再建され、成泰年間（1889-1907）および啓定 5-7 年（1921-23）に修理されたことが文献史料からわかっている。また 20 世紀初頭に撮影された写真では、主楼閣だけを残して左右の翼楼閣が破壊された状態が記録されている。さらに主楼閣上層部分が台風によって大破したとも伝えられている。ユネスコ・ワーキンググループの報告書（1993 年）によると、啓定 5-7 年の修理が解

体修理であったことがわかっている^{注 20)}。五鳳楼は、主楼閣初層のドゥイ・ケオがタイプ B の絵様^{注 21)}を用い、一部にタイプ A' の絵様（I5・I12）が用いられていることから判断して、明命 14 年の再建時に創建建物の部材（タイプ A' のドゥイ・ケオ）を一部に再利用して新築し、成泰年間に台風によって失われた翼楼閣を再建し、さらに台風によって主楼閣を失ったので、啓定 5-7 年（1921-23）に解体修理を行い、その際、主楼閣の上層に新しい C' タイプのドゥイ・ケオ絵様を用いたと考えられる。

7-2 Bタイプに属する遺構の建立年代

興祖廟：興祖廟は、文献史料によると、嘉隆 3 年(1804)に皇考廟（前身建物）が創建され、明命 2 年(1821)に再建され、明命 10 年(1829)、紹治 2 年（1842）および嗣徳 31 年（1877）に屋根修理が行われ、1947 年に戦火により焼失した。1951 年瑞輝皇后が金龍地区の離宮・金龍社轉を興祖廟として移築した^{注 22)}が、金龍社轉の建立年代は不明であった。しかし現遺構のドゥイ・ケオ絵様が、B タイプの特徴を示していることから、紹治期（19 世紀中ごろ）に建立されたものと考えられる。ところで金龍地区に延福長公主祀が現存するが、この建物は、紹治帝が結婚する長女のために 1846 年に建てた住宅である。離宮・金龍社轉は延福長公主祀と同時期に紹治帝によって建立されたものかもしれない。

7-3 C'タイプに属する遺構の建立年代

五鳳楼：現在の五鳳楼は、前記したように、明命 14 年（1833）に再建され、成泰年間（1889-1907）および啓定 5-7 年（1921-23）に修理されたことが文献史料より明らかになっている。五鳳楼上層のドゥイ・ケオ絵様は、20 世紀初頭以降の特徴をしめしていることから、啓定 5-7 年（1921-23）の解体修理のとき新たに制作されたものと考えられる。

8. おわりに

以上の考察をまとめると以下になる。

- 1) 阮朝木造建築遺構におけるドゥイ・ケオ絵様の制作年代を明らかにするため、現存遺構 34 棟の創建年代と修理経緯を漢喃史料である『大南寔録』『欽定大南會典事例』『大南一統志』の三文献史料および HMCC からの聞き取りにより明らかにした。
- 2) 阮朝木造建築遺構におけるドゥイ・ケオ絵様の様式を「A 両渦文型、B 龍頭吐水唐草文型、C 小龍頭渦唐草文型、D 渦唐草文型」の 4 つに分類した。五鳳楼上層のドゥイ・ケオ絵様は、「C 小龍頭渦唐草文型」の変形と考え、「C' 小龍頭渦唐草雷文型」とし、C タイプに含めた。
- 3) ドゥイ・ケオ絵様の変遷を概観すれば、A タイプ：両渦文型→B タイプ：龍頭吐水唐草文型→C タイプ：小龍頭渦唐草文型およびD タイプ：渦唐草文型→C' タイプ：小龍頭渦唐草雷文型となる。
- 4) ドゥイ・ケオ絵様の様式編年から判断して、新たに遺構の建立年代を推定した結果、寿寧殿は嘉隆 3 年（1804）に、五鳳楼主楼閣上層は啓定 5-7 年（1921-23）に、興祖廟は紹治期（19 世紀中ごろ）にそれぞれ建立されたと考えることができる。

なお本稿は、平成 22-26 年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究 A）「阮朝・太廟・昭敬殿の復原計画-ヴィエトナムの文化遺産に関する

る国際協力」(研究代表者・ものつくり大学教授白井裕泰)の成果の一部である。このプロジェクトは、早稲田大学ユネスコ世界遺産研究所(代表者・早稲田大学教授中川武)および省立フエ遺跡保存センター(代表者・所長ファン・タン・ハイ)と共同で推進したものである。

参考文献

- 1) 一之瀬裕行, 中川武, 西本真一, 中沢信一郎, 土屋武, 坂本忠規, 白井裕泰, 六反田千恵, 高野恵子, 川嶋彩: フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究 1・研究方法と問題点, ヴィエトナム／フエ・阮朝王宮の復元的研究, その 36, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.287-288, 2000.9
- 2) 川嶋彩, 中川武, 西本真一, 中沢信一郎, 土屋武, 坂本忠規, 白井裕泰, 六反田千恵, 高野恵子, 一之瀬裕行: フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究 2・現存木造遺構のドゥイ・ケオ彫刻絵様分類, ヴィエトナム／フエ・阮朝王宮の復元的研究, その 37, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.289-290, 2000.9
- 3) 六反田千恵, 中川武, 西本真一, 中沢信一郎, 土屋武, 坂本忠規, 白井裕泰, 高野恵子, 川嶋彩, 一之瀬裕行: フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究 3・五鳳楼初層のドゥイ・ケオ彫刻絵様分類, ヴィエトナム／フエ・阮朝王宮の復元的研究, その 38, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.291-292, 2000.9
- 4) 一之瀬裕行, 中川武, 西本真一, 中沢信一郎, 土屋武, 坂本忠規, 白井裕泰, 六反田千恵, 高野恵子: フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究 5・肇祖廟における木部彫刻部位とその特徴, ヴィエトナム／フエ・阮朝王宮の復元的研究, その 46, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.171-172, 2001.9
- 5) 六反田千恵, 中川武, 西本真一, 中沢信一郎, 土屋武, 坂本忠規, 白井裕泰, 高野恵子: フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究 6・元渦紋形状の分類, ヴィエトナム／フエ・阮朝王宮の復元的研究, その 47, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.173-174, 2001.9
- 6) 一之瀬裕行, 中川武, 白井裕泰, 中沢信一郎, 土屋武, 坂本忠規, 六反田千恵, 高野恵子: フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究 7・ケオの形状と彫刻について, ヴィエトナム／フエ・阮朝王宮の復元的研究, その 51, 日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ, pp.525-528, 2002.3
- 7) 坂本忠規, 中川武, 白井裕泰, 中沢信一郎, 土屋武: 阮朝漢喃史料における建築の記述, ヴィエトナム／フエ・阮朝王宮の復元的研究, その 53, 日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ, pp.533-536, 002.3
- 8) 高野恵子: 細部意匠研究による編年考察の可能性, ベトナム伝統住居の体系的研究—所在調査と意匠技法の編年—総論第 5 章, 昭和女子大学国際文化研究所紀要 7, pp.31-35, 2002.3
- 9) 六反田千恵, 高野恵子, 齋藤潮美, 中川武, 中沢信一郎, 土屋武, 坂本忠規, 白井裕泰: フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究 8・意匠形状による大梁(ダウ・チェン)の分類, ヴィエトナム／フエ・阮朝王宮の復元的研究, その 61, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.671-672, 2002.9
- 10) 六反田千恵: 隆徳殿ドゥイ・ケオ彫刻絵様構成について, グエン朝・太廟・隆徳殿の修復計画, その 2, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.285-286, 2006.9
- 11) 六反田千恵, 白井裕泰, 中川武: 両渦紋ドゥイ・ケオ彫刻の先端渦紋の分類について, 阮朝・太廟・隆徳殿の修復計画, その 8, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.183-184, 2007.9
- 12) 六反田千恵, 白井裕泰, 中川武: 両渦紋ドゥイ・ケオ彫刻の先端渦紋の分類について 2, 阮朝・太廟・隆徳殿の修復計画, その 14, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.131-132, 2008.9
- 13) 六反田千恵, 白井裕泰, 中川武: 隆徳殿裳階部ケオの彫刻絵様構成について, 阮朝・太廟・隆徳殿の修復計画, その 20, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.33-34, 2009.9
- 14) 六反田千恵, 中川武, 林英昭, 木谷建太: ドゥイ・ケオのプロポーションについて, ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復元的研究, その 151, 日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ, pp.657-660, 2010.3
- 15) 六反田千恵, 中川武, 林英昭, 木谷建太: 勤正殿の前楹ケオ・身舎大梁・ヴィ・ジャ・トゥの彫刻絵様について, ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復元的研究, その 155, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.607-608, 2010.9
- 16) 白井裕泰, 中川武: 阮朝フエ王宮における隆徳殿の当初材について, 日本建築学会計画系論文集, No.671, pp.149-155, 2012.1
- 17) 六反田千恵, 中川武: 勤正殿承露部の彫刻絵様について, ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復元的研究, その 168, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.469-470, 2012.9

- 18) 六反田千恵, 中川武, 林英昭, 木谷建太: 明命帝陵に関する史料記述比較その 2, ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復元的研究, その 173, 日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ, pp.745-748, 2013.3
- 19) 六反田千恵, 中川武: 連棟型遺構「承榮」彫刻絵様分類, ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復元的研究, その 177, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.591-592, 2013.8
- 20) 六反田千恵, 中川武: フエ阮朝建築遺構群における建築形式の分類, 現存遺構と『欽定大南會典事例』における記述の比較考察, 日本建築学会計画系論文集, No.688, pp.1409-1414, 2013.6

注

- 注 1) 参考文献 16)によると、ものつくり大学が行った 2005-2010 年の解体修理によって、隆徳殿は嘉隆 3 年(1804)に創建され、明命 13 年(1832)に屋根修理、成泰 12 年(1900)に半解体修理が行われ、構造形式の変更はないが、現遺構には当初材と後補材が混在していることが明らかにされた。
- 注 2) 参考文献 20)によると、興祖廟、延寿宮正殿、凝禧殿は規模を変更した可能性が認められる。
- 注 3) 参考文献 2)参照。
- 注 4) 富澤明は、『大南寔録』、『欽定大南會典事例』、『大南一統志』から造営に関連する記述を抽出し、『阮朝王宮及び皇帝陵の建築群の造営に関する文献的研究』(早稲田大学修士論文、2011)にまとめた。さらに六反田千恵は、『古都フエの建築』(ファン・トン・アン著、1992 年)および HMCC におけるヒアリングから造営に関連する事柄を抽出し、富澤論文を加えて遺構ごとに整理し、『フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究』(早稲田大学博士論文、私家版、2014.2)にまとめた。
- 注 5) 参考文献 1)－(6)、(9)－(15)、(17)、(19)参照。
- 注 6) 鴻澤門・碑亭のドゥイ・ケオ彫刻絵様は、龍が変形しているが渦龍型としている。
- 注 7) 参考文献 2)参照。
- 注 8) 五鳳楼のケオ意匠に特異性があるのは、7-1 で詳述したように、造営経過の複雑さが反映しているのではないかと推察される。
- 注 9) 参考文献 21)を参考に再構成した。
- 注 10) 川嶋がケオ木鼻絵様の部位名称を「先端、中央、柱元、柱元下」としたのは、部位を位置情報で表現したものであるが、獣形の部位として「鼻先、顔、頭、顎」としたほうが、部位名称として相応しいと考えられる。
- 注 11) 参考文献 10)参照。
- 注 12) 寿寧殿は、少なくとも建立当初の木鼻絵様を残している可能性がある。
- 注 13) 参考文献 8)参照。
- 注 14) 「富樫洋之, 中川武, 西本真一, 中沢信一郎, 白井裕泰, 高野恵子, 土屋武, 石原彩子, 佐々木太清, 柳下敦彦: 興廟の構造形式と平面計画における単位長, ヴィエトナム／フエ・阮朝王宮の復元的研究(その 10), 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp.473-474, 1997.9」を参照。
- 注 15) 同慶帝陵の完成は、息子の啓定帝の時代とされ、後殿の建立年代はこれより降る可能性がある。
- 注 16) 隆安殿(1908 年移築)、明徴閣(1902 年移築)、延寿宮長愉榭、嗣徳帝陵鳴謙堂、同慶帝陵凝禧殿後殿・宮門(啓定帝期?)が啓定帝期(1916-25 年)以降に移築または大規模修理されたことが明らかになれば、D タイプは 20 世紀初期の絵様と考えることができる。
- 注 17) 図 7 は、六反田千恵『フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究』(早稲田大学博士論文、2014.2)より転載した。
- 注 18) 獣形木鼻は「口」を持つが、繰形木鼻は「口」がなくなっている。
- 注 19) 明徴閣は 1902 年に、隆安殿は 1908 年に移築されているので、両者のドゥイ・ケオ木鼻は移築時のものである可能性がある。もしもそうであるならば、繰形木鼻の初出は延寿宮長愉榭(1848 年)ということになる。
- 注 20)・22) 六反田千恵『フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究』(早稲田大学博士論文、2014.2)参照。
- 注 21) 五鳳楼初層ドゥイ・ケオ木鼻(タイプ B)の絵様を図 8 に示す。

図 8 五鳳楼初層 ドゥイ・ケオ木鼻(タイプ B)

A STUDY ON THE DUOI KEO DESIGN OF WOODEN ARCHITECTURES IN THE NGUEN DYNASTY AT HUE

Hiroyasu SHIRAI^{*}, *Chie ROKUTANNA*^{**} and *Takeshi NAKAGAWA*^{***}

^{*} Prof., Dept. of Building Technologists, Faculty of Technologists, Institute of Technologists, Dr.Eng.

^{**} Staff, Itsuko HASEGAWA Atelier, Dr.Arch.

^{***} Prof. emeritus, Waseda University, Director, Open Air Museum Meiji-Mura, Dr.Eng.

In order to clear the transition of design style, we have studied on the Duoi Keo design of wooden architectures in The Nguen Dynasty at Hue. The conclusion of this paper is as follows. : 1. To clarify the production age of the Duoi Keo design of wooden architectures, we have cleared the creation age and detailed repair of 34 wooden architectures in existence by the document and hearing. 2. We have classified the Duoi Keo design of wooden architectures to four types, A type is “兩渦文型”, B type is “龍頭吐水唐草文型”, C type is “小龍頭渦唐草文型”, D type is “渦唐草文型”. 3. The transition of the Duoi Keo design is as follows. A-type → B-type → C-type and D-type. 4. We have presumed the new construction age of the wooden architectures in existence, that is that Dien Tho Ninh was built in 1820, the upstairs of Ngo Mon was built in 1921-23, and Hung Mieu was built in the middle of 19 century.

(2015年6月2日原稿受理, 2016年1月14日採用決定)